

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 近代日本の形成と電力業  
—名古屋地域における近代的電力業の成立—

氏 名 浅野 伸一

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、電気事業は、地域の生活や産業に深い繋がりを持ち、地域との関係のなかで事業を展開した事業であることに着目し、近代社会の形成に電気事業がどのように関わったかを、名古屋地域を事例として検討した。すなわち、戦前期名古屋地域を対象とし、地域関係が本格的に生じる近代的電力業の成立期を基軸として、①近代的電力業の成立、②電力による地域の変容、および③地域問題の発生とその対応という三つの分野を中心に研究を進めた。

第一に、中部における近代的電力業の成立の成立に関し、従来の研究は名古屋電灯から大同電力・東邦電力の設立を個別に取り上げ、一体的に検討してこなかった。本論では名古屋における近代的電力業が経営者福沢桃介によって推進されたことに着目し、木曾電気製鉄の設立、木曾川水利権の分離、関西電気の設立などを一体として捉えるように努めた。

まず第1章で、士族授産事業として名古屋電灯の創立を論じて出発点とし、第2章で守旧的な士族層から近代的電力業への改革主体となる福沢桃介への経営権の移行問題を扱った。従来の研究は福沢の投資活動に注目してきたが、本論ではその過程で社内外において権力争いの展開されたことを示した。

第3では、名古屋電灯から木曾川水利権等が分離されて大同電力設立至る過程を検討した。この発端となる木曾電気製鉄について従来の研究は注目してこなかったが、本論では木曾電気製鉄に関する新資料の発掘を通じて分離過程を明らかにした。

第4章は、東邦電力の設立に関して、これまで橋本寿朗説（「五大電力」体制）と渡哲郎説（複合的供給論）とが提示されていたが、いずれも東邦電力設立にとって重要な指摘を含んでいると考えた。そこで、本論では両説を統一的に捉えることとし、福沢構想に基づいて設立を見た関西電気という会社を注目し、そこからの自立過程として捉えた。

次に、電気利用の拡大のもたらした地域社会の変容について、三つの章で検討した。

第5章では電灯需要について考察した。本論では、従来利用されてこなかった電灯普及率を算定し、一九〇七年頃までの低迷期を経て、電気料金の低下によって電灯需要は急増しはじめ、一九一九年頃にいたって普及率は一〇〇%になったことを示した。これまでの研究は、電灯の低迷期や電気料金との関係は明確にされていなかった。この結果から、一九一〇年代を通じて照明革命が生じたと考えた。電灯業は地域独占とされてきたが、照明需要という点では競争市場であること、照明革命によって公益事業として位置づけられるようになったことを主張した。

第7章では、電灯普及率が一〇〇%を超えて以降の需要形態を検討した。この時期は名古屋が工業都市として発展し、それに伴ってモダン都市が形成された時期であった。本論では、このモダン都市が電灯の普及と一体となって進展したことを示し、モダン都市の形成に寄与したことを示した。なお、この時期の電灯需要に関する研究は殆ど見られない。

第6章では、電力需要について検討した。工業化の展開に果たした電力の役割を検討し、水力発電の発達と、それを推進した福沢桃介によるもう一つの分野として、電気製鉄、電化学、電気鉄道などの新規需要を自ら創設する「需要創出活動」を指摘し、このことが従来遅れていた名古屋の近代工業の発展に繋がる契機になったことを示した。

第三点として、電気事業が広域化し大規模化する過程で、需要地域と電源地域において生じた地域紛争について検討した。第8章で取り上げた市行政との三〇年におよぶ対立と緊張（報償契約問題、電気料金問題、事業買収問題）とは、これまで取り上げられることが少なかったし、取り上げられてもそれぞれ別個の問題として扱われた。本論では、名古屋市政資料館所蔵の文書を分析し、この間の経緯をフォローし地方自治体による公共規制への対応は、公共性一般ではなく、地域の利益に立った公共規制という側面があり、そのことが、解決を困難にしていたことを指摘した。

一方、第9章では、大規模水力の開発にともなう既存の水利権との調整問題（木曾川上流での木材流送問題、下流での農業用水問題）を取り上げた。自治体史では住民の権利を守るたたかいとして記述され、研究史では旧河川法上の利水規定の問題を指摘しているが、本論では二つの水利権の調整がどのようにして図られたかという視点から検討し、新技術の導入や粘り強い努力を通じて、「新しい利水秩序の形成」がなされたことを明らかにした。

以上のように、本論文では、近代的電力業の成立とその社会的経済的意義を地域との関わりの面から検討し、従来の電気事業史研究において、見落とされていた事実を発掘し、また電力史に関する新たな見方を提示し、これによって近代的電力業の形成が、今日の電気事業の原点となっていることを示した。